

あかしびと

96号 (クリスマス号)

日本バプテスト同盟金沢文庫キリスト教会

〒2360046 横浜市金沢区釜利谷西 3-36-20

牧師 森島牧人・恵 名誉牧師 白根新治

電話 045-783-5475

e-mail: church.kanazawabunko@gmail.com

http://kanazawabunkochurch.sun.bindcloud.jp

(聖書：ルカによる福音書 2 章 1 節-14 節)

「平和の君」の誕生を祝う

森島牧人 (牧師)

クリスマスおめでとうございます。皆さまの上に、主の御祝福が豊かにありますように、お祈りしております。

さて、日本では一年の初めは元旦 (1 月 1 日) ですが、キリスト教の暦 (教会暦) では、1 年は「アドベント」から始まるのです。これは「到来」を意味するラテン語 (Adventus) で、西方教会では、11 月 30 日の「聖アンデレの日」に最も近い日曜日からクリスマス・イブまでの約 4 週間です。グレゴリウス 1 世の時代に、それは、4 回の主日 (日曜日) と定められました。

では誰が到来するのでしょうか。それはクリスマスの意味に関係しているのです。

“Christmas” は、二つの言葉を合成 (“Christ” + “mas”) したもので、“mas” はミサと同じ意味ですから、クリスマスとは「キリストを礼拝する日」なのです。

聖書 (ルカ 2:1-14) では、主の天使は「布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子」が主メシアであると告げます。すると、突然、この天使に天の大軍

が加わり、「いと高きところには栄光、神にあれ、…」と神を賛美します。さらに、15 節以下でも、「飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた」羊飼いたちは、「見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った」と記されています。主の天使や天の大軍が、また羊飼いたちが神を賛美するのは、この乳飲み子に、神の介入を見ているからです。

人間の常識に立つかぎり、ローマの玉座に座る皇帝アウグストゥスこそが「救い主」だと、人々は考えていたと思います。しかし、実は「飼い葉桶に寝かされてある」この乳飲み子こそが、真の「救い主」であると、聖書は伝えるのです。

私たちは、歴史上の出来事を憶えるとき、世界のはじめから 1 年、2 年と数えているわけではありません。あるときを基点に、“B.C.” と “A.D.” という記号を用いて表わします。“B.C.” とは、“Before Christ” 「キリスト誕生の前」の略です。“A.D.” はラテン語の “Anno Domini”、 「主の年に」の意味です。二千年の昔、最初のクリスマスに、主が私たちのところに来られ、そのお方と共に、私たちが歩む年となったからです。

そして、この「平和の君」と呼ばれる主イエス・キリストは、今、私たちの内にも、事実生まれているのです。そして、この私たちの内に灯ったこの光は、いま私たちが互いに手を繋ぐことによって、さらに大きな「希望の光」となるのです。



クリスマスは神様と私たちの喜び 白根義輝

子どもの頃の楽しい思い出はいろいろありますが、お正月のお年玉を初めとして、誕生日やクリスマスなどにプレゼントをもらう喜びがありました。私は64歳ですが、さすがにこの歳にもなると、幼い頃のようにもらう喜びに溢れているということはありません。

その代わりに、プレゼントをあげる喜び、楽しみができました。息子や娘が成長して家庭を持ち、やがて孫ができると、その成長を見るのがこの上ない楽しみとなりました。洗濯した小さなシャツや下着が干してあるのを見ても、可愛いと思うほどです。

プレゼントの内容も孫の成長と共に変わっていきます。赤ちゃんの時は天井に吊り下げるメリーゴーランド、小さな手でも握れるおもちゃ、やがて三輪車や自転車と、扱える力や能力に見合う物へと移行していきました。

プレゼントしたその時々、満面に笑みを浮かべて喜びを表すその姿を見ると、私自身もこの上ない喜びと充足感に満たされます。

ですから、孫や子どもの喜ぶ顔が見たいという思いが強すぎて、ついつい早めにプレゼントを渡したくなり、慌てん坊のサンタクロースと揶揄されることもしばしばです。

さて、クリスマスはイエス・キリストの誕生をお祝いするキリスト教の大切な行事の一つです。日本でも11月中旬になると、街中がクリスマスの装飾でにぎわい始めます。クリスマスセール、クリスマスパーティ、クリスマスプレ

ゼントとクリスマスという言葉が溢れますが、売り上げを伸ばす年末商戦であつたり自分たちが楽しむための機会として用いられ、残念ながら、イエス様がいないクリスマスを過ごす人が殆どようです。

イエス様は神様からの最大のプレゼントです。

プレゼントは愛する者、愛する対象が受け取って初めて価値あるものとなります。また、どんなに高価なものでも、包装紙を開けて中身を見なければ、知らなければ本当の喜びや感謝の気持ちは湧いてこないでしょう。

神様がイエス様をプレゼントしたい人、愛する対象は、子どもでも大人でも、男の人でも女の人でも、年齢や性別の制限は一切ありません。一人残らず、すべての人が愛の対象です。神様は、全員にイエス様を受け取って喜んでもらいたいと願っていますし、喜ぶ顔を見たいと思っています。私たちの喜びは、同時に神様の喜びではないでしょうか。

今年のクリスマスも、神様からのプレゼントである独り子イエス・キリストの誕生を御一緒に喜びたいと思います。

数種類のフレッシュグリーンを
編み込んだクリスマスリース
大井法子(教会員)



クリスマスプレゼント

勘田義治



毎年、春分の後にやってくるイースターと共に、もうすぐやってくるクリスマスは私たち教会に集う者にとって、とても楽しみな祝祭のひとつです。それは言葉では伝えきれない想いと

共に祈りや奉仕を通して得ることができる“喜び”があることは言うまでもありません。しかし民族や異なる地域によって、このクリスマスに対するの感じかたというものはずいぶん違うようです。つまり世界にはさまざまな形のク

リスマスの過ごし方があるということです。

日本では信徒でなくとも、クリスマスはカップルや友人と過ごす“特別な日”として定着していますが、キリスト教を国教とする欧米の国々では家族や親戚が集まり、プレゼントを交換し、楽しく過ごすのが一般的だそうです。また、東南アジアで唯一のキリスト教国であるといわれるフィリピンでは、カラフルなランタンやオーナメントなどで町中が色鮮やかに飾られ、イブには多くの人が教会のミサに参加します。自宅のドアを開け放ち、訪れる人に食事を振る舞うのが風習だそうです。

近年のインターネットの発達に伴い、情報の授受は学術的なネットワークから日常生活のインフラへと変革を遂げ、各地域の文化も互いに非常に緊密な交流がなされるようになりました。ゆえに、イエス・キリストの降誕を祝う祭「クリスマス」についても、それぞれ異なった思想と感情を持ち、異なった生活をしている者がたとえ地球の裏側にあろうとも、時間と空間を同時に共有し、喜びを分かち合うことが出来るようになったのです。

しかしながら、この“近代化”がもたらした様々な弊害、即ち、人間の想像力を超えるほどのテクノロジーの発達に因って生じた新たな世界では、あたかも隣人のような繋がりが手軽に作れるようになったにもかかわらず、相互監視社会が生まれ、ネット上での付き合いに神経をすり減らし、人間関係を保つことによるストレスを感じている者が何と多いことか。この弊害は社会全体に影響を与え、不信感を助長しているといえます。

一方、タイとビルマの国境にまたがる山奥にも、今やじわじわとこの、テクノロジーの波が迫ってきています。かつて、人跡未踏の地とまで言われた少数民族の集落にもソーラーパネルで電気が供給されるようになると、有線の電話よりはるかに簡単に、スピーディーに携帯電話が普及したのです。今や村人にとって携帯電話は生活の必需品であり、街に出稼ぎに行った家族と絆を保ち、深めるための重要な手段です。

とはいうものの、民族のクリスチャンはクリスマスには礼拝に集い、昔ながらの風習にしたがってお祝いの宴である愛餐会を開きます。普段の食事は極めて質素で、基本的には白米と野菜で、周囲の野山で採取された食材が何日も同じように食卓に並ぶことも多いのですが、愛餐会では鶏や豚をつぶし、伝統的な料理を大量に

作り、集った一同で楽しむのが慣例です。とくに、来客がある時は何品ものメニューが食卓に並び、客をもてなすのが彼らの流儀です。

彼らは家畜として水牛、豚、鶏を日常的に飼っていますが、それらは生活に必要不可欠な資金源であり、儀礼の生け贄でもあります。この生け贄については、本来なら彼らのキリスト教信仰の礎に燔祭（神に生贄を捧げる儀式）を重んじるユダヤ教の思想が流れていると考えるのが自然ですが、少数民族アカ族のキリスト者の場合、彼らの信仰には精霊や先祖への信仰が未だに色濃く残っており、豚や鶏は祖霊や精霊への捧げものとして供えられます。

今、私たちはキリスト教を信仰する欧米諸国とイスラム過激派の原理的な対立によって象徴される危機の中に身を置いています。そのせいか日本では、宗教に対する不信感、生きる指針を見つけられぬことが人々を深い厭世観に導いています。その様な状況の中、私は信仰、つまり考え方を通して、生きかたというものを正確に見極めることが大事であろうと考えます。今や、それは大変大きな問題であり、最も身近な問題であるはずです。

10年を超えた少数民族への訪問は私にとって得難い経験でした。しかもそれが目に見えぬ力による導きで、全てをゆだねた結果であると自覚したとき、私は改めて広大な世界が目前に広がることに気づき、人々は互いに異なる文化を理解し、恵を共有できるのだということに大きな希望を持つことができたのです。このことは私にとって最高のクリスマスプレゼントであり、メッセージだと思うのです。



少数民族アカ族教会のクリスマス

今日まで守られ 西山律子

今日、夫の運転免許更新に同伴しました。視力がかなり落ちて、眼鏡を作ってくるように指示されました。

一週間ほどで出来上がりますが、それでもやっとなら0.7ということでした。いつか運転できない日が訪れるかもしれません。

しかし、全てをご存知の主なる神さまが、これから一年、また運転しても良いと思われるなら視力も免許も許可されることでしょう。

「今日まで守られ 来たりし我が身
つゆだに憂えじ 行く末などは
いかなるおりにも 愛なる神は
すべての言葉をば よきにしまわん」

大好きな讃美歌のひとつです。
神さまを讃美できる幸せ。

辛い時、心がくじけそうなとき、主なる神さまにお祈りし、助けを求め、平安を得ることができ

る幸せ。今まで頂いたたくさんの恵みを数えながら、感謝せずにはられません。

週のはじめの日曜日は、主なる神さまを礼拝し、心の底より讃美歌を歌います。

牧人牧師、恵牧師よりメッセージをいただき、心満たされ、また今日から神さまの愛の中で生きる元気を心いっぱいにして家路につきます。

水曜日は、教会での聖書のみ言葉を学ぶ時が与えられ、恵先生と教会員の皆さまと楽しく過ごすことができます。聖書を学ぶほか、日々の問題や心にあること等、先生や皆さまから解をいただき、ほっとしたり、慰められたりしています。

和やかな語らいと昼食を共にすることは至福の限りです。

今日なすべきことを行い、明日に希望を抱いて主なる神さまが導いて下さる道を歩みたいと思います。



☆聖夜☆ 夏山坂上で味わう隠れた幻想の世界 犬塚志朗

私はクリスマス聖夜のひと時を夏山坂上の教会で過ごします。その教会は800mほど緩やかな坂を上った丘の上にあります。だから私にとっては下界ではありません。

そこで聖夜の燭火礼拝に参加します。人工的な明かりを消して、蝋燭の灯のもと、讃美歌、聖書の朗読、牧師のクリスマス・メッセージに耳を傾けます。そこで天使の歌声、救い主誕生の物語を心に描きます。

礼拝後は階下で簡単なお祝いの茶話会があります。初めての人にも、信者でなくても歓迎されています。一年ぶりに再会する人もいます。クリスマスのお祝いの茶菓をいただき

ながら、近況報告をし、各々の人が談笑のひと時を過ごします。外は厳しい冬の寒さでも室内では熱気で身も心も温かく、下界での苦しみ、悲しみもその時はそっと離れています。

終了後、坂を下って行きますが、途中下方の世界に目を奪われます。ちらちら光る民家の明かり、クリスマス・イルミネーション、左右に行き交う京急電車の明かり、走る自動車の前照灯と後尾灯、少し遠方には八景島の花火が上がり、さらに遠くに東京湾が霞んで見えます。上空は星空。静と動の美の調和を味わいます。全くの沈黙の世界。でも私の心の中で響いているのは、次から次へと流れる

喜びのクリスマス・聖夜の曲。そしておまけに年末のベートーベンの歓喜の歌まで・・・
心は朗らか 喜び満ちて / 心は楽しく 幸せ溢れ / 響くは我らの喜びの歌。

教会から 10 km 離れた平地に居を構え、古希をとくに終えた私にとっては、徒歩で通える近くの教会へと考えました。しかしこの 10 キロの自転車での道程、最後の 800m の坂は徒歩で、自転車を引っ張って登坂することが、運動不足の私にとって良い運動になります。しかも、風光明媚なこの夏山坂上の教会

でお世話になっていることに喜びを感じています。

当教会の
昨年の
クリスマス
燭火礼拝



白根新治名誉牧師の信仰自叙伝(あかしびと 94・95 号の続き)



93 歳の誕生日会、満面の笑顔の白根名誉牧師
於名誉牧師宅 2016.9.29

1961 年 9 月 24 日～11 月 5 日の週報から抜粋しました。(羽入田 毅)

13

中学 3 年の時であろうか。パールバックの書いた「戦える信徒」を読んで非常に感動した事を覚えている。書中のアンドリウという牧師が支那の民衆を熱愛し彼らに福音を伝えた。しかし報われる事は何も無かった。否 貧困と涙と苦悩が報われただけである。しかし彼の決意は骨を埋めるというのが最後の望みであったのである。休暇でアメリカに帰って

翌日の礼拝で祈った時アメリカ人の聴衆を前にして支那語が出てきた。途中で彼は気がついたであろう。英語で祈りを終わったという。その支那語で祈っておる間人々は意味が分からなかったが、聖霊の力を感じたという。

(1961.9.24)

14

「想出の記」は後に映画化されたが、単なるロマンス・ストーリーで終わっていて物足りなかった。しかも横宝で上映されるという事を知って友達を誘って見に行ったものである。帰りに原文の中に出てくる同志社の信仰のリバイバルは一切カットされていたので「あれはくだらん」などといっぱしの文士気取りで気炎を上げたものである。終戦後に入ってきた「王国の鍵」という映画はカトリックの宣伝映画であったが、大変感動的であった。基督教に関しては恐らく日本では到底このような映画は望めないであろうか。宗教的な映画はこれまでに幾本かあったが、いやらしい神父とか牧師が出て来るので鼻持ちならぬものばかりであった。日本で欧米をしのぐ宗教名画は出来ぬか。(1961.10.8)

15

昭和 16 年太平洋戦争が始まった年の 3 月

中学を了えると前記三井牧師の母校である青山学院神学部に入學した。しかし本来は関西学院神学部に行きたかったのであるが、牧師の切なるすすめがあつて青山学院に進學した。だがどうも落ち着かなかつた。寮生活をしてみたが、同室の上級生は頭の良い人であつたが、全然勉強せず、掃除は1年中せずという人であつたので、若かつた私は大いに失望してしまつた。それに渡辺善太という神学部長はすぐれた学者であり、多くの著書を通じて親近感を持っていた筈なのに、なんとなく好きになれなかつた。これも若さから来る人を見る目がなかつたのであろう。それに派遣された教会がいけなかつた。そこの牧師さんともうまくいかなかつた。性格的にあわなかつたのであろう。こんなことで学校が嫌になり関西学院に転學した。(1961.10.22)

16

関学の神学部に入學した私は再び寮生活をするようになった。地域的な関係から青山に比べて朝鮮の學生が多く約半数を占めていたであらう。面白いことはこの學生の中で優秀なのはとびぬけて素晴らしいが劣等生も多く、その差があまりにも著しかつた。これは当時朝鮮の若人は日本の統治下にあつて宗教的にしかのびられなかつた為に優秀な真面目な學生が来たためであらう。終戦後生き延びたこれら優秀生は殆どアメリカに留學したとのことである。後に私が東京の神學校に移つてからクラスメートに全君という學生がいたが語學がすぐれていた。どうも日本人より中国、朝鮮の學生の方が語學が達者なものが多かつた。これは何に原因するのであらうか。日本人は日本語だけで通ずると意識が働いて

いるからではなからうか。(1961.10.29)

17

同期の學生にT君がいた。彼は文字通り苦學力行の士で専檢をパスして神學校に入つてきたのである。以前、職工さんでいろいろな誘惑にもあつたとか、わたしよりも五つ位年上であつたと聞いている。冬のある夜火鉢を囲んで彼のザンゲ話を聞いたことがある。純粹をモットーとする若い私にはあまりにも刺激的な話であつた。それから数日後彼の部屋に入つていくと盛んに火をおこしていた。炭火の中には火箸が入れてある。何のためにか。彼には愛人があつた。しかしその愛人は普通の女性ではなかつた人で今日のいわば夜の蝶であつた。彼は彼女の執念に取り付かれたとでも云うか、夜な夜なうなされるとのことであつた。彼は聖なるものと惡を追い求める自分に終止符を打つべく、己が身にやけ火箸で十字架を書いたのである。

(1961.11.5)

白根名譽牧師の近況報告

「皆さま、お健やかに過ごしてでしょうか。私は、火・金曜日の2日間リハビリに通っています。

仲の良い友達もでき、主に歩行訓練を行っています。また、木曜日はデイケアに行き、入浴・昼食・レクリエーション・散歩などを行っています。先日は、黄金色に輝く銀杏並木をドライブし、過ぎ去りゆく秋を楽しんできました。」

金沢文庫キリスト教会 クリスマス礼拝の御案内

クリスマスイブ・燭火礼拝 12月24日(土)午後4:00~5:00

クリスマス礼拝 12月25日(日)午前10:30~12:00

クリスマス祝会 クリスマス礼拝後

教会学校クリスマス礼拝・祝会 12月25日(日)午前9:00~10:00